

書燈

2025年 No. 59



大学図書館に思う



附属図書館長
菊地 芳朗

私は、おもに日本列島を対象とする考古学、特に古墳時代を専門とし、2003年に福島大学行政社会学部に着任しました。そして、2024年4月に学術情報・グローバル化担当副学長に就任したことにともない、図書館長を拝命しました。

考古学においては、各地で行われた発掘調査の成果をまとめた報告書（以下「報告書」）が研究の重要な基礎をなしており、日本国内で毎年約2千冊も刊行されています。しかし、報告書はほとんど市販されておらず、刊行部数も少ないため、必要な報告書を入手するのが困難なことが多々ありました。

大学教員となって最もありがたかったのは、附属図書館のレファレンス機能により、他大学図書館から必要な報告書や論文を容易に取り寄せてもらえるようになったことです。これにより、手元にない文献を自分で購入する必要や、所蔵先の図書館等に赴く必要が軽減され、ストレスや金銭的・時間的負担から大きく解放されました。レファレンス機能は図書館の業務としてはごく一般的なものですが、これを活用している利用者、特に学生はおそらく多くなく、とても勿体ないと常々思っています。

そのようなことで、附属図書館には日ごろから非常にお世話になってきており、まさに研究上の頼れる存在です。その一方で、図書館長になって最新の図書館業務を知るよ

うになると、特に近年のデジタル化の進展にともない、大学図書館の業務が著しく多様化、複雑化しているのを強烈に実感することになりました。「オープンアクセス」くらいなら何とか知っていましたが、「JUSTICE」、「JPCOAR」、「転換契約」、「JAIRO Cloud」、「OASE」など、これまで聞いたことのない用語が頻繁に使われ、それぞれが現在の大学図書館の業務と深く関わっています（それぞれの用語に興味のある方は、ご自身で調べてみてください）。冊子体の図書を借り、静かに勉強する場所という図書館のイメージは過去のものといえ、まさに現代の大学図書館は、学術情報センターと呼ぶべき場所に進化しています。

国が旗をふり2025年度から本格化した論文等の即時オープンアクセス化は、遠からず研究者の研究発表の方法を大きく変えることになるでしょう。理系はすでにその時代になっています。考古学の報告書についても、電子化されて公開されることが当たり前となりつつあり、希少な報告書を手に入れるため大金を払い、血眼になっていた時代が嘘のようです。コロナ禍で減少した大学図書館入館者数が現在も戻らない傾向が各地で見られるのですが、このことは利用者の減少を意味するのではなく、コロナ禍をきっかけとして図書館の利用の仕方そのものが大きく変わったこと、つまり、自宅や研究室で図書館の各種機能を使いこなす時代となっていることを示すというのが正しいと考えられます。

私自身を含む“紙マニア”の人たちには、つまらない時代になったと嘆かれるかもしれませんが、この流れを止めることは不可能です。冊子体の図書を大切にしたいという思いをもちつつも、大学関係者は新しい時代の大学図書館の機能と役割を十分に理解し、利活用することが必須になっており、利用者の一人としてもこれからの附属図書館の業務を応援していきたいと考えています。

福島大学附属図書館は、かつて学長、経済学部長などを歴任された故吉原泰助先生のご遺族から、先生が生前に収集された貴重書コレクション 96 冊をご寄贈いただきました。

吉原先生は生前、ご自身の歩まれた研究ジャンルとして、第 1 に 18 世紀フランス重農主義経済学研究、第 2 に 19 世紀前半の古典派経済学者シモン・ドゥ・シスモンディ研究、第 3 にマルクスの再生産論＝恐慌論研究を挙げておられました。このコレクションは、先生の蔵書から本学図書館の規定での貴重書にあたる部分を選んだもので、その第 1 と第 2 のジャンルに関するものが主体となっています。つまり 18 世紀の後半期、経済学史上有名な 1758 年のケネーの『経済表』の作成からフランス大革命直前 1780 年代にかけてのフランス重農主義運動の関連文献、そして 19 世紀前半、1801 年の『トスカナ農業概観』を処女作として 1840 年代におよぶシスモンディ生前のオリジナル原書群です。それ以外にも、セーやシャプタルといった 19 世紀初めのフランス経済学関係の書が種々含まれています。

選別にあたって先生のお宅の書庫を拝見させていただきましたが、先生ご自身、没後の本学図書館への寄贈の遺志を持たれた上で、特に今述べた 2 つのジャンルに属するいわゆる古版本を自ら取り分けておられたようでした。いくつか紹介しましょう。



18 世紀フランス重農主義文献

■ ミラボー『人間の友 *L'Ami des Hommes*』1762 年

ミラボーは、いわばケネーの 1 番弟子にあたるフランス貴族で、この『人間の友』という書は、重農主義のフランスにおける拡大の初期において、ケネーによる指導を受けつつも、ケネー自身に代わってその思想の普及を担うことになったものです。ケネーの『経済表』自体はヴェルサイユ宮殿の中で私的に作成され回覧される形で生まれるのですが、それが初めて広く一般の目に触れるように公表されるのは、この書によってでした。

■ ミラボー『農業哲学綱要 *Éléments de la Philosophie rurale*』1767 年

ミラボーは『人間の友』に続き、ケネー学説を系統的に解説した大著『農業哲学』を出版しますが、これはその要点を略述したものです。ケネーが自身で書いた部分が含まれていることが知られています。

■ 『市民日誌 *Éphémérides du citoyen*』1767 年

1760 年代中頃には、ケネー思想はフランスで多くの知識人や行政官たちを引き付けて独自の学派を形成し、独自の機関誌を持つようになります。『市民日誌』はその一つで、当初ケネーに反対していたボードーがケネー学派に加わり、自分が主筆をしていた雑誌を学派に提供したものです。やがて学派の運動の後期の指導者となるデュボン・ド・ヌムールが編集長となり、多くの関連文献を世に出す役割をしました。アダム・スミスの資本概念の先駆の位置を占めるものとして経済学史上有名な、1769 年のテュルゴ『富の形成と分配に関する省察』もこの雑誌が初出です。

シスモンディ原典

シスモンディは、1773 年にスイスのジュネーヴに生まれ、フランス語圏で活動し、1843 年まで、つまり大革命からナポレオン帝政、王政復古、さらに七月革命へ、というフランス史上最大の激動の時代を生きた人です。経済学史上では、スミス経済学の大陸における紹介・普及の最も早い担い手の一人として、さらに、1810 年代後半から 1825 年にかけては、その後ヨーロッパを襲い続けることになるいわゆる周期恐慌の第 1 サイクルが始まる時代ですが、その中で起こる「古典派恐慌論争」あるいは「第 1 次恐慌論争」と呼ばれる論争の当事者として知られる人です。

古典派恐慌論争とは、この頃にロンドンから始まってヨーロッパやアメリカに波及していった、恐慌という近代資本主義の矛盾としてマルクス経済学の問題につながっていく事態について、これは単に一時的な部分的不均衡が生じただけで、資本制の拡大軌道自体には問題がないのだとするリカード、セーらに対して、シスモンディとマルサスとが、これはそういうものではなく、全般的な過剰生産あるいは消費需要の絶対的不足から

起こってくるものだ、という学説を対置して対立する、という論争です。

シスモンディの経済論について、マルクスは『共産党宣言』の中で、シスモンディは「近代の生産関係に内在する矛盾を鋭く暴露した人」、「資本主義の否定面を直視し反論の余地なく論証した人」といった形で讃えました。先ほど述べた吉原先生の第3の研究ジャンルであるマルクスの特に恐慌論につながる多くの材料を提供している人であり、その点で、吉原先生はシスモンディに強い関心を持たれたのでしょう。

その一方シスモンディは、経済学書ばかりでなく、中世以来のイタリアやフランスの社会や文学の歴史についての膨大な研究や大部の資料集の編纂をおこなった人でした。この吉原蔵書は、重要な経済書が網羅されているばかりか、シスモンディの大部の歴史書の類など、まことに丹念に集められています。その点は、一橋大学所蔵のメンガー文庫や小樽商科大学所蔵の手塚寿郎文庫など日本国内の著名な大コレクションよりもむしろ勝っており、シスモンディに関する個人蔵書としては日本で他に例を見ない充実したもの、といってい良いでしょう。いくつか例を挙げます。

まず先生の研究に直結する経済書ですが、主要著作が網羅されています。

■『トスカナ農業概観 *Tableau de l'agriculture de Toscane*』1801年

シスモンディは本来の姓はSimondeなのですが、フランス革命の激化の中で迫害を受け、一家は一時的にジュネーヴからイタリアのトスカナ地方に逃れます。その地でイタリアの歴史や社会、産業に興味を持った彼が、中世ピサの貴族Sismondi家と自家のつながりを信じるようになり、名前に付加したのがその名の始まりです。この書は、ジュネーヴに戻った彼が27歳で出版した処女作で、後の経済観につながる要素が多々見られるものです。

■『商業的富について *De la Richesse commerciale*』1803年

スミスの経済学説の体系的な解説をおこない、大陸でのその普及、拡大の先駆となったことで、同年出版のセー『経済学概論』とともに経済学史上よく知られた書です。

■『経済学新原理 *Nouveaux Principes d'Économie Politique*』（第2版）1827年

古典派恐慌論争を引き起こす原因を作った書で、1819年初版に続き、論争途上での加筆を含め再版されました。スミスのいわゆる自由放任体系への批判を含んで、スミス経済学からの「転向」がいわゆる、経済学上の名著とされるものです。

■『経済学研究 *Études sur l'Économie Politique*』1837年

上記『新原理』後に発表された雑誌論文などの集成で、原理論的展開にとどまらず、この産業革命期における小農民層の没落と「プロレタリア」化、工場労働者の悲惨な状態、諸階級の収入の動きと生産・消費の矛盾の実像、金融資本と国家の退廃的癒着など、非常に広汎な社会的現実の否定面がパノラマのように描き出されています。後世のマルクスへの影響としては、『新原理』よりもこちらの方が大きいともいえるでしょう。

次に歴史、文学関係としては、シスモンディは後のミシュレなどに影響を与える実証史学の先駆者と評価される人です。原史料の直接の編纂に基づく史料集成を兼ねた非常に大部の歴史書をいくつも残しており、吉原先生は丹念に集められています。

■『中世イタリア共和国史 *Histoire des Républiques Italiennes du Moyen âge*』（新版）1840年

イタリアの中世に自由を謳歌した共和国賛美の歴史書、資料集で、1807年が初版です。上記『トスカナ農業概観』によって、当時のジュネーヴの知識人たち、特にスタール夫人らの自由主義グループに近づくきっかけを作った彼は、この書で認められ、バンジャマン・コンスタンやシュレーゲルなどの知遇を得、その後の出版活動や政治活動の基盤を作ります。

■『南欧文学論 *De la Littérature du Midi de l'Europe*』（新版）1837年

この書は、いわゆるトルヴァドール（吟遊詩人）の活動などを通じて、アラブ文学の影響も受けつつ独自に発展した、イタリア語、プロヴァンス語、スペイン語、ポルトガル語などの言語圏の中世詩文学、騎士道文学などを、フランス語で初めて紹介した書として、文学史上知られています。彼の後のフランスのいわゆるロマン主義文学者たちに、そもそも中世や騎士道などの題材に触れるきっかけを与える役割を果たしました。



もう10年以上前のことになるが、大学に入学して最初の一年は、学生生活に心から打ち込むことができずにいた。講義を聴講しても、課外活動に参加しても、やりがいを見出すことができず、いっそのこと退学したほうがいいのではと考えることが幾度となくあった。

そうしたあてのない不安の中で出会った一冊が「悩む力」であった。大学一年目が終わろうとする春休み、大学の書店に足を運んだ際に、偶然にも目に入ったことを記憶している。著者である政治学者の姜尚中氏のメッセージ「悩みなき人生こそ、貧しく不幸な生き方ではないか」が、大学生であった私の背中を少し押ししてくれた気がしたのである。

本書でユニークだと思うのは、夏目漱石やマックス・ウェーバーを手がかりに、「悩むこと」を紐解いている点である。例えば夏目漱石の「坊っちゃん」や「心」などの物語や登場人物は、現代社会における様々な悩みと強くリンクしてくるのである。

私自身、特に気に入っているページが「第4章 『青春』は美しいか」なのだが、その中で、次のようなメッセージが書かれている。

答えのない問いに悩んでしまう。それは、結局、若いからそうなるのだと思います。達観した大人は、そのようなことは初めからしません。

ですから、私は青春とは、無垢なままでのものごとの意味を問うことだと思います。それが自分にとって役に立つものであろうとなかろうと、社会にとって益のあるものであろうとなかろうと、「知りたい」という、自分の内側から湧いてくる渴望のようなものに素直に従うことではないかと思うのです。

そこには、挫折や悲劇の種がまかれていることもあります。未熟ゆえに疑問を処理することができなくて、足元をすくわれることもあります。危険なところに落ちこんでしまうこともあります。でも、私はそれが青春というものだと思うのです。^{*1}

(中略)

人間が「成長する」ということは「老成する」ことだと思いますが、その場合、極端に言うとも二つの形があると思います。ごこちない表現ですが、「表層的に老成する」か、「青春的に老成する」か、そのどちらかです。

漱石とウェーバーは言うまでもなく、後者です。彼らほど優れた人でも、一生「青春の蹉跎」みたいなものを繰り返していたような気がします。ですから、彼らも青春的に老成していたと言えるのではないのでしょうか。

(中略)

氷の上を滑るようにものごとの表面を滑っていたら、結局、豊かなものは何も得られないと思います。青春は挫折があるからいいのだし、失敗があるからいいのです。

年齢を重ねても、どこかで青春の香を忘れたくないですね。^{*2}

はたして無垢なままでのものごとの意味を問うということができているだろうか、「青春的に老成」できているだろうか、と問われれば自信がない。しかし、何度も挫折や失敗を味わった学生時代の経験は間違いなく現在につながっており、年齢を重ねながらも「青春の香」は宿り続けていると感じている。それは学生達と研究活動を送る上で、常に絶やさずにいたいものである。

情報化社会、市場経済圏の拡大、グローバル化が進む現代において、我々は様々なストレスを感じている。なぜ学ぶのか、なぜ働くのか、なぜ生きるのか、未来に希望はあるか——。こうした問いや「悩み」に対して、本書はヒントのみならず勇気や希望、そして悩み続ける力を与えてくれるはずである。出版されて20年近く経とうとしているが、現代に通じるメッセージがたくさん込められた著書であるため、福大生の皆さんにもぜひ手にしていただきたい。

※1 p.87-88 ※2 p.94-95



木工作品の寄贈について - 「杜のうた」、「空遠く」 - 福島大学名誉教授 片野 一

この度は、私の作品を福島大学附属図書館に展示していただき、誠にありがとうございます。

現在でも、日本の工芸作品の大きな方向性に変化はありませんが、細かく見れば、作家ごとにそれぞれの表現のオリジナリティや造形上の特色が工夫されています。私の場合、作品を制作するにあたって、自分の日常で使用している木材（ウォールナット、メイプル、マホガニーなど）から得られる「構造と切断から生じる造形上の変化」を具体的に表現するため、木材工芸の特色を考慮し、特徴的な表現に集中して作品を仕上げようとしています。

木工作品「杜のうた」は、私が30代半ばに東京都美術館で開催された「日展」に出品し、会場に並んだものです。この作品は、杜の中でさえずる鳥たちの合唱をイメージさせ、観る人を和やかな空気で包み込んでいる様子を具体的な表現に活かすため、作品上に見られるストライプ状の木材の配列と切削に伴うウォールナット材とメイプル材の二つの材種が生み出す造形美によって表現しています。

また、木工作品「空遠く」は、私が40代半ばに日本新工芸家連盟の会員として「日工会展」に出品し、会場に並んだものです。この作品は、広がる遠近と共に、一羽の鳥がまっすぐに空の彼方へと飛んでいく力強い姿を表現し、その姿を「戦う」人間像に二重写しにしています。この際に出品した会の特徴として、工芸作品の性格や造形表現について、従来に比べて極端に難解な作品を避ける傾向があることから、基本的に出品作品には慎重さが求められます。私は作品制作にあたって、自分の日常制作で使用する木材や材料の選択、木工技術の尊重に努めています。その中で、寄木方法の工夫によって、平行な二枚の板材をそのまま圧着するのではなく、2～3枚の材料の切断面に角度をつけることで「構造と切断から生じる造形上の変化」を積極的に使っています。これにより、「空遠く」をはじめとして前後十年余りにわたる作品制作の時期には、寄木の変則的な組み合わせの試みや、象嵌を組み込むことで変化を持たせることにより、造形上の多様化を図りました。

これら作品展示により、来館者の安らぎと創造的な学習空間の創出につながれば幸いです。



「空遠く」(新館 2F)



「杜のうた」(開架閲覧室)

福島大学校友会からのご支援による資料整備について

「学生教育支援環境等整備事業」として、令和3年度より電子資料や参考図書の購入をご支援いただいています。令和7年度は、以下の資料を整備することができました。

- 福島民報データベース（福島民報新聞） ●みんゆうデジタルアーカイブ（福島民友新聞）
- 人文社会科学／自然科学／農学など様々な分野の参考図書／電子ブック

▶新聞データベースの利用は、学内LANから [図書館 Web サイト](#) > [資料を探す・調べる](#) - データベース一覧にアクセスしてください。

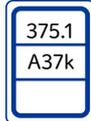
▶参考図書・電子ブックは、全て [OPAC（蔵書検索システム）](#) から検索 できます。

学内教員著作寄贈図書



これからの 授業研究法入門 23のキーワードから考える

秋田喜代美,
坂本篤史 [ほか] 著
東京図書, 2025.4



資料ID: 125002412

本書は、理論的概念に基づきながらいかに授業を観るかについて、実際の写真等(福島県の学校にも多数ご協力いただきました)を示しながら初学者でも読みやすいよう具体的に論じています。第1部と第3部では、授業研究について

の基本的な姿勢や考え方を述べています。第2部では、「話し言葉の質」「書き言葉の質」「教室空間と場」「時間系列での学びの変容」「学びを仲立ちするメディア」という枠組みで具体的な観方を整理しながら、章ごとに独立していますので、どこからでも読むことができます。たとえば、授業における沈黙や間をどう捉えるか、子どもが探究する問いをどう捉えるか、1時間単位だけではなく、単元単位、カリキュラム単位でいかに観ていくか、といったことなどについても、理論的概念のレンズを通してみると、子どもたちの学びの姿がより深く見えてきます。具体的な授業改善につながる授業の観方を考えるにあたって、様々な方の対話の媒介として本書を活用いただけましたら幸いです。

(人間発達文化学類/坂本 篤史)



認識力を高める授業 読みの解像度を上げる メカニズム

佐藤佐敏著
三省堂, 2024.10



資料ID: 124030357

境界知能にある方が日本には約14%いると言われていいます。全国学力・学習状況調査においては、自由記述の問いに対して毎年およそ10%の子どもが白紙で答案を提出しています。この事実は、授業で取り残されている子ども

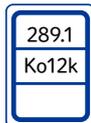
たちが一定数存在することを示唆しています。この子どもたちはどのように文字記号を理解しているのでしょうか。私たちが違った景色を見ているのかもしれませんが。本著では、「文字記号で記された内容を解像度高く理解する」ための国語の授業論を提案いたしました。理論編ではF・D・ソシュールやA・コージブスキーを援用して言葉と思考の関係を説明しました。実践編では当学附属小・中学校の先生方や当学を卒業して教壇に立った先生方から授業事例を提供いただきました。本著は、拙著『思考力を高める授業』の姉妹編にあたります。教師を志す学生の皆さんに読んでいただき、取り残す子どものいない授業を心がけてほしいと願っています。

(人間発達文化学類/佐藤 佐敏)



小林昇福島期日記 1941-51年

阪本尚文, 新保芳栄 [編]
(私製), 2024.8



資料ID: 124018074

こちらは、福島大学経済学部の学問的基礎をつくり、すぐれた歌人でもあった戦後日本を代表する経済学史家、小林昇(1916～2010年)の戦時下から占領期にかけての日記の内容紹介になります(『行政社会論集』第37巻第1号の抜刷)。1941年1月から51年3月までの日記について、日常生

活の様様、交友関係、教職・研究活動およびその他の項目毎に、とりまとめています(出征していた1944年7月17日～46年7月14日分は除く)。この間の交友関係、戦争体験、研究活動等について、小林は生前にいくつかの機会に語っているのですが、日記の中には、ナチズムへの評価など戦後の回想からはうかがえない記述も含まれています。福島大学附属図書館には、小林と関係の深い大塚久雄の草稿類や戦前の講義ノート、そして大塚関連書簡が所蔵され、また、近年、小林とも交流があった高橋幸八郎の日記・関連書簡も寄贈されました。小林の日記は、これらの他の草稿類などとともに、戦後日本の社会科学の生成・展開過程の実証的な検討にとって、基礎資料になりうるものです。

(行政政策学類/阪本 尚文)

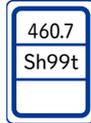
著作資料のご寄贈のお願い

先生方からご寄贈いただいた資料は、新館2Fの「福島大学教員著作物コーナー」等に配架され、本学の貴重な資料として永く保存し、広く学生や地域の方にもご利用いただいております。著作物のご寄贈について、ご協力をお願いいたします。



タイムカプセルの開き方 博物館標本が紐ぐ生物多様性の過去・現在・未来 (種生物学研究; 第45号)

種生物学会編;
兼子伸吾[ほか]著
文一総合出版, 2024.10

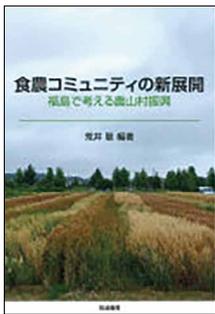


資料ID: 124025814

本書『タイムカプセルの開き方—博物館標本が紐ぐ生物多様性の過去・現在・未来—』は、博物館などに収蔵されてきた標本が、現代の研究においてどのような価値を持つのかを、最新の研究事例とともに紹介した一冊です。さま

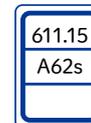
ざまな生物の標本は単なる「過去の記録」ではなく、DNA解析や画像解析などの技術革新によって、過去の生物や生態系、環境変化を読み解くための重要な科学資料として再評価されています。本書では、生物の由来や分布の変化、過去の遺伝的特徴の解明など、多様な研究分野と標本との関係が、具体例を交えながらわかりやすく解説されています。私が執筆を担当した7章では、福島大学に所蔵されている80年以上前に絶滅した植物の標本を例に、DNA解析の実際について紹介しています。研究者のみならず、学生や一般の読者にとっても理解しやすく、標本を未来へ引き継ぐ意義について考えるきっかけを与えてくれる一冊です。

(共生システム理工学類/兼子 伸吾)



食農コミュニティの新展開 福島で考える農山村振興

荒井聡編著
筑波書房, 2025.3



資料ID: 124039550

郷土食の価値が地域内で再認識されている。過疎化のもとでそれは衰退の危機にあるが、ローカルフード運動として再生が試みられている。本書では5名のメンバーによる福島、秋田、岐阜の事例研究をもとに、地域の食と農を支える新たな食農コミュニティの形成について考察を行って

いる。

福島県浜通り地域は、原発事故被害を受けて、地域が大きく疲弊、伝統食の継承も危機に瀕している。そのようななかで地域のアイデンティティを回復すべく、食農コミュニティ再生の試みが少しずつ進められている。対象5市町村での地域食の再生の現状をふまえ将来を展望している。ついで、発酵醸造を核として、行政、加工業者、農業者、消費者が一体となって発酵ローカルフードシステム作りを進めている秋田県横手市の取り組みの成果と課題を整理している。そして、中山間地域において、地域食を食農コミュニティビジネスとして展開・発展させてきている岐阜県加茂郡白川町、郡上市明宝地区の取り組みから、農と結びついた地域食の展開のあり方について考察している。

(食農学類/荒井 聡)



ケアするラジオ 寄り添うメディア・コミュニケーション

金山智子編;
久保田彩乃[ほか]著
さいはて社, 2024.3



資料ID: 124003401

「ラジオ」とはなんだろう。人々が多様なメディアを使い、情報交換ができるようになった現代社会の中で、“音と声”のみで情報を伝えるというこのシンプルなメディアの価値とは何か。本書は、音声とそれを聴くことが持つ「親密さ」に目を向け、人を癒し、励まし、支える営みとしての

ラジオを“ケア”の視点から捉え直す本である。

本書内には、離島の伝統文化を言葉によって後世につなぐコミュニティ放送の試みや、刑務所や病院での番組づくりによる「内と外」の架け橋づくりの試み、災害被災者/避難者の地域との関係を結び直すための教育実践など、多様な現場での実践が描かれている。そしてこれらの事例は、ラジオが情報を伝えること以上に「共にいる/在る」ことを示すためのコミュニケーションツールとなってきたことを映している。学術的な論考を含みつつも、具体例が多く読み進めやすい。

とかく情報発信・受信に速さや強い刺激が求められる時代に、「ゆっくり寄り添うメディア」の新しい価値が見えてくる一冊である。

(教育推進機構/久保田 彩乃)

カウンターの内側から

共生システム理工学研究科 早川 歩

私が図書館での業務に就いてから、まもなく2年が経とうとしています。私にとって図書館は身近な存在であり、静かな環境で様々な分野の本に気軽に触れられる親しみ深い場所でした。その魅力を、カウンターの内側からより実感するようになりました。

福島大学附属図書館には、人間発達、経済経営、行政政策、理工、食農といった各専攻に対応する資料が幅広く所蔵されています。ただし、開架資料は蔵書の一部であり、複数の層に分かれた書庫には、開架の約2倍の資料が所蔵されています。書庫には師範学校・高等商業学校時代の図書や考古学資料、英語やロシア語の資料も含まれており、附属図書館に所蔵されている幅広い分野、年代、言語の資料は学習・研究を支えています。多くの資料の中から、気になったものに気軽に手を伸ばせる環境は図書館の特徴であり魅力の一つであると思います。

図書館は、知識を深めたり広げたりすることで学習や研究の支えとなる場所であると思います。多様な資料やサービスに囲まれた図書館では、一人で集中して学んだり、話し合いな



がらグループで学んだりすることで、知を深めることができます。また、新しい分野や思いがけない資料との出会いを通して、知を広げることもできます。

このような学びの場をより有効に活用していただくためにも、図書館の各種サービスについて気になることや利用に際して困ったことがあれば、ぜひカウンターへお問い合わせください。図書館で過ごす時間や資料との出会いが、皆さんの学びをより豊かなものにするのを願っています。

福島大学附属図書館報

書 燈

発行日 / 2026年3月

発行元 / 福島大学附属図書館
〒960-1293 福島県福島市金谷川1番地
tel.024-548-8087

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>



福島大学附属図書館報「書燈」第59号 目次

● 巻頭言 「大学図書館に思う」	菊地 芳朗 …………… 1
● 吉原泰助文庫貴重書について	岩本 吉弘 …………… 2.3
● 思い出の一冊	村上早紀子 …………… 4
● 木工作品の寄贈について -「杜のうた」・「空遠く」-	片野 一 …………… 5
● 校友会からのご支援による資料整備について	附属図書館 …………… 5
● 学内教員著作寄贈図書の紹介	
『これからの授業研究法入門：23のキーワードから考える』	坂本 篤史 …………… 6
『認識力を高める授業：読みの解像度を上げるメカニズム』	佐藤 佐敏 …………… 6
『小林昇福島期日記：1941-51年』	阪本 尚文 …………… 6
『タイムカプセルの開き方：博物館標本が軸ぐ生物多様性の過去・現在・未来』	兼子 伸吾 …………… 7
『食農コミュニティの新展開：福島で考える農山村振興』	荒井 聡 …………… 7
『ケアするラジオ：寄り添うメディア・コミュニケーション』	久保田彩乃 …………… 7
● カウンターの内側から	早川 歩 …………… 8

編集
後記

今回の書燈は、故吉原先生が所有されていた貴重書、片野先生の実美術作品、校友会からの寄贈資料、本学の先生方からいただいたご著書など、本学に縁のある方々からお譲りいただいたものを紹介する記事が大多数を占め、現在の図書館の環境整備の厳しさを象徴(?)しているかのようにも思えます。ですが、これからも多くの方にご支援いただきながら、少しずつ利用環境を整え新しい動きにも対応していきたいと思っております(A)。